

## 私は土になりたい

巴 金

(中国)

石上 詔 訳

最近ある歌を耳にした。『それは私です』という歌で、聞いたのは二回だった。歌声は湖面を渡るそよ風のように私の心の上を吹いて通り、それにつれて私の心は幼年時代へ、わが故郷へと戻っていった。近年私は故郷を非常になつかしく思う。多分、落ちつくところへ落ちつく時が来たのかもしれない。それに付けても、ある一つのことが私の脳裏に深く刻みつけられて、もう三年になる。パリを訪問したときのこと、私は新たに知り合った友人の家で夕飯の御馳走になった。友人はフランス籍の中国人で、フランスの娘さんと結婚し、家庭生活は、とても幸福だった。彼自身、仕事で成果を挙げ、名望があり、社会的地位も高かった。私たちは、彼の家で歓談し、楽しく過ごした。しかし、いとまを告げて車に乗ると、私は、ある考え方に捕らわれ脱却できなかつた——長い間国外で暮らすのは不幸なことだなあ、という考えである。あれから今日までずっと私はそう思っている。そういう考え方は必ずしも正しくはない、いや間違いですらある、とは私にもわかっている。だが、これは私の偽らざる心なのだ。数十年来、一本の縄が私の心をしつかりと縛りつけている。一九二七年一月、上海から船に乗ってフランスへ行つたとき、私は、『海行雜記』の中でこう書いた——「さよなら、わが不幸なる郷土よ！」一九二九年四月、パリを再訪して凱旋門近くのある四つ星のホテルに泊つた。朝食前、私はよく、一人静かに窓際の牀掛椅子に座して、白いレースのカーテンを透かし

て窓下のひっそりした横丁を見おろした。そこで私が見たものは、パリの街の景色ではなく、北京の長安街や上海の淮海路、杭州の西湖や広東省の鄉村、さらには、街角に井戸が二つある成都のあの裏通り……などだった。八時になると人がやって来るので、私は立ち上がり、そこで「親愛なる祖国と人民」とはまたもやお別れ、という次第である。毎朝いつもこの調子で、まるで毎日一回、栄養補給に国へ帰っているみたいだった。これは、ごく自然なこと、私は相変らず自分の同胞の中で暮らしているように思われ、想像の中に前記のような光景を再現し、一種の力が自分を支えていくように感じた。そこで私は、氣力があふれ、心がのびやかになり、全身が暖かくなるように感じたのである。

私はいつとも人民のことに言及するが、人民は、私がよく慣れ親しんだ数知れぬ平凡で善良な人々だ。私は、それらの人々の間で成長したのである。私の正義、公平、平等の観念も、門番小屋や馬小屋の中で培ったものなのだ。私は、不遇な生活を余儀なくされたたくさんの人々の許で、生活を熱愛し、生命の意義を理解することを学んだ。懐が楽でない人ほど氣前がよく、懐が楽な人ほどけちである。しかし、人間というものは正しく、こういつた途絶えることのない氣前のよい貢献があるおかげで存在し、発展していくのである。

近ごろ私はよく、六、七十年前の昔のことをなつかしく

思う。成都の古い公館内の馬小屋や門番小屋の光景が、しよつちゅう私の目の前に現われる。アヘン吸飲用のランプ一つ、破れござ一枚、損害を蒙り辱しめを受けたという、めんめんとして語り尽くせぬ暮らしの話、それに、忘れられない永遠不変の結論——「人はおのれに忠実に」(原文は、人要忠心)などだ。馬小屋の中で暮らしているかごかき連中は、地主の坊ちゃんである私には、その心を開いてくれた。その一人、周さんは、しみじみとこう言ったことがある——「あつしはただかごかきをやってるだけじゃあござんせんよ。人様のお役に立つて言うんなら、あつしの上を踏みつけてお通りくだすつたつてようござんすわい」。私はよく、夏の夜とか秋の夕方とかを、このじめじめした馬のいない馬小屋にかくれて、過ごした。

門番小屋の下僕の生活は、かごかき連中に比べると、いくらかまじだつたが、それも高が知れたものだった。彼らの中にいると、私は心がくつろぎ、伸び伸びとした気分になった。後になつて回想してみると、受難を通して浄化された魂に接したのは、門番小屋や馬小屋が始まりだった。動乱十年の「文革」期間を経験したればこそ、私は、受難を通して魂を浄化する意義を理解できた。私の心はよく、門番小屋で、「澄んだ水」を愛し、「濁り水」を憎んでいた趙おじさんや文さん、馬小屋のかごかき周さんや任さんの身辺に立ち戻っていく。あの人たちはもういないし、小屋も跡形もなくなっている。だが、かつて光を発していたもの

は、今もなお私の心の中で光を発している。私は、人々が苦難に会うのを見、人々がどのようにして受難を通して私心雑念を取り除いたかを目にした。「文革」期間中、私はいろいろと考え、あれこれと回想した。ある時期には、私も苦難に遭うことで「贖罪」しようと思ひ、物事に努力した。が、私はただ自分のために、一日も早く解放されたいと切望するだけだった。私心雑念は取り除かれず、従って魂は浄化できなかつた。

いまにして私はわかつた。受難は試練であり、鍛練であり、自分の魂のしみを歯をくいしばってえぐり取ることである。それは形の上のことでもなく、見せかけのことでもない。大切なのは、厳粛に、真剣に苦痛を身に受けることである。「一切合財みんなやつて来い、おれは持ちこたえてみせるぞ」。

私は、これ以上さらに試練を受けようなどとは思ひもよらなかつた。ところが左大腿を骨折し、いわゆる「最も保守的、最も安全な」方法の治療を受けた。試練はまだ終りを告げておらず、完全に閉門を通過することもできなかつたのである。病床に在って、また悪夢にうなされながら、私はひたすら私心雑念に悩まされた。今後どのようにして生きていこうか？ 私には、この問題に答えることができなかった。

長い長い眠られぬ夜は、あたかも茫々たる霧の海に投げ出されたみたいで、私は、ひとときの木片につかまって岸か！ だが、私は羽を切られた鳥みたいに、飛ぶ希望を失ってしまった。私の脚は動かさず、私の心は飛ぶことができな。私の思考力は……。しかし、私の思考力は、一切の障害を打破し、一切の難関を突破して、私になつかしく思ふ一切の場所へ到達することができ。そういう故郷は烈火のように私の心を燃え上がらせて灰となし、私の私心雑念を灰燼に帰してしまふに違ひない。

わが故郷の土よ、わが祖国の土地よ、私は永遠におまえたちと一緒に日光や雨露を受け、草花樹木や若芽とともに生長しよう。

私の唯一の願ひは、土となって、人々の暖かい足の裏で踏んでもらいたい、ということである。

一九八三年六月二十九日

(了)

#### 訳注

- 1 『それは私です』——原題は、『那就是我』。一九八三年の流行歌の一つ。故郷を離れた人の望郷の歌。
- 2 四つ星のホテル——フランスのデラックスなホテル。星の数は、最高が五つ。
- 3 最も保守的……な治療——患者の生命機能と一般的健康を維持するため採用する治療方法で、外科に常用する。たとえば、手術しないで治癒の目的を達しようとして、患者の一般的情况と患部あるいは器官の働きを改善し、外科手術施行の準備をする（一九六五年版、新編『辞海』）。

辺にたどりつきたい、とどんなに思ったことか。すると突然、濃霧を通して差し込んできた光明が私には見えた。私は古い公館の馬小屋や門番小屋に戻っていき、周さんのやせて黄色い顔や趙おじさんの長いひげをまた見たのである。そのとき私は自分が私心雑念のとりこになり、魂を浄化しようがなくなっていることに気づいた。だから門番小屋内の素焼皿の灯心の明かりや馬小屋の中のアヘン吸飲用ランブを見るとき私は救われ、おかげで私の心は霧の海の中に沈没しないで済んだ。私はついに想い出した——あの「先生」たちが私に教えてくれたものは正しく私心を去り、自分を忘れるということだった、と。生活面で恵まれなかつた人が、あんなふうに生活を熱愛する。彼らに比べたら私など、ものの数ではないのではなからうか？ 私の何百万字にのぼる著作も、かごかきの周さんの言う四個の文字「人要忠心」にはなお及ばない（あるとき、彼らの炊事のさい、私はたき火を手伝った。火がよく燃えないのを見て、周さんは、「人要忠心、火要空心」（人はおのれに忠実に、たき火は中を空けて燃せ）と私に教えた）。馬小屋で過ごしたあのたそがれ時を想ひ、門番小屋で過ごしたあの幾夜かを想うとき、私はあたかも自分が幼年時代に返つたような気がした。

私は、幼年時代の足跡をどんなにたどってみたいかしれない！ そして、生まれ故郷に戻り、片時も忘れられない馬小屋の土を、どんなにか手でなでさすってみたいこと

底本：筑摩書房刊『巴金病中集』



巴金 (はきん)  
(1904～)

中国の作家。本名は李蜀棠。四川省成都の地主官僚の家  
庭に生れる。五・四運動の影響下、アナキズムの洗礼  
を浴びる。二三年故郷を離れ、南京、上海へ出る。渡仏  
後二七年に処女作『滅亡』を書き、二九年の帰国と前後  
して発表、作家生活に入る。『家』(三三)、『春』(三八)、  
『秋』(四〇)の激流三部作は代表作となる。精神的に執  
筆や翻訳に携わる一方、編纂者としても活躍。戦時下の小  
市民の苦悩を追求した『憩園』(四四)、『寒夜』(四七)  
も知られる。革命後はしばしば批判的とされ、六六年  
の文革で失脚。文壇に復活後は『随想録』(百五十編)五  
集、七九―八六)を書き上げる。本作品はその九六にあ  
たる。